

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	村上春樹文学における 20 世紀後半の理想主義への応答 ——全共闘運動・コミューン・宗教性の相対化から信仰の再構築へ
氏 名	王 静

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近年村上春樹が提唱する「理想主義」が、①大きな物語に基づく理想主義を相対化すること、②ポストモダンの空虚な精神状況への危機意識、③ポストモダンの時代に台頭する危険な宗教的理想主義に対抗することを前提にしていると把握した上で、村上文学による 20 世紀後半の理想主義への応答を検討したものである。

具体的には、理想主義を追究する社会的なコンテクスト(60年代の社会運動、70年代のコミューン運動、80年代の宗教性の回帰現象)、及び理想主義をめぐる思想的なコンテクストを入念に考察し、理想主義的な実践・思想と村上文学との関わりを通時的に検討した。その上で、記憶と宗教心理学をめぐる思想を導入し、村上が提示した意識の深層に向かう理想主義の意味を言語化したのである。本論文は、村上文学の変遷を考察したと同時に、20 世紀後半の理想主義の変遷を辿り、21 世紀の理想主義の行方を検討したものである。

本論文は三部構成であり、序章と終章のほか、9 章で構成されている。第一部では直接的に 60 年代の理想主義の状況を表象する『1973 年のピンボール』、70 年代のコミューンを描く『ノルウェイの森』、80 年代のスピリチュアリティの聖地(アトス)を描く「アトス——神様のリアル・ワールド」を取り上げ、それぞれの時代の理想主義が村上作品でいかに相対化され、いかに継承されているかを検討した。

第 1 章では、『1973 年のピンボール』に描かれた「土星」、「金星」、「配電盤」、「砂場」、「スペースシップ」など一見無意味なものごとに、60 年代末の全共闘運動、ヒッピー文化、新左翼の思想が隠蔽的でありながら綿密に描かれていることを論証した上で、本作品が、新左翼思想と決別し、60 年代の全共闘運動とヒッピー文化を批判しつつも、それぞれのポジティブな面を浮上させ、60 年代の解放感を掬い取っている作品であることを解明した。

第 2 章では、『ノルウェイの森』における「阿美寮」を分析し、先行研究で見逃されている「阿美寮」と 70 年代のコミューン運動との関連を掘り出した。「阿美寮」は実

在しないコミュニティでありながら、70年代に流行ったユートピア共同体のパロディであり、同時にノーマライゼーションの思想によって構築される前衛的なコミュニティであることを検証した。また、抑圧のない友愛・平等の共同性という理念には回収されない「阿美寮」の記憶の問題、時間の複層性を分析することで、その作品が70年代のコミュニティが求め、現在に至るまで再生産され続けている共同体に対する理想主義のパラドックスを暴いていることを明らかにした。

第1章と第2章の分析を通して、村上文学が60年代末、70年代の理想主義を相対化する一面を検証したのと同時に、ヒッピー文化、コミュニティの中に発展した意識下の理想主義(スピリチュアリティ志向)の根本的な問題への批判が欠如していることを確認することもできた。80年代のスピリチュアリティの興隆に対する村上作品の対応を、第3章で論じた。アトス巡礼記の分析の際、先行研究で見落とされていたアトスとスピリチュアリティとの関係に焦点を当てて、この巡礼記に新たな読み方を提示した。同時期の川又一英のアトス巡礼記との比較を通して、村上による巡礼記の特異性を抽出し、村上がアトスのルール不安定性、修道僧の多様性を掬い上げ、アトスを聖と俗がせめぎ合うトポスとして表象していることを論じた。最終的には、スピリチュアルなものに傾倒する新霊性運動が聖俗を切り離し「大いなる自己」を追求するのに対し、それに回収されず聖なる自己と俗なる自己のつながりを主張することが、村上の特徴であることを明らかにした。

第4章では、オウム真理教事件を経過した後、『1Q84』によって再表象されたコミュニティの意味を検討した。まず、作中のコミュニティ、「タカシマ塾」と「さきがけ」を区別し、「さきがけ」が、直販、反イデオロギー・反真理、ユニットの自由連合、スピリチュアリティ志向など、コミュニティの典型的な要素を組み合わせた表象であることを解明した。「さきがけ」が「ヤマギシ会」などの閉鎖的なコミュニティとは異なり、開放的で先駆的な連合体として設定されているにもかかわらず、それをオウムのカルト宗教に変容させる意味を論じた。「さきがけ」は、80年代の宗教性の台頭の要因を70年代のコミュニティ・ブームまで遡り、70年代の理想主義にあるポストモダンの相対主義とプレモダンへの楽天的な憧れへの混交性を批判的に捉えたコミュニティ表象なのである。このコミュニティの再表象から、スピリチュアリティ志向の危険性を見落としたことへの村上の反省意識及び補完意識を読み取った。

第二部は意識の深層に向かう理想主義を検討する前段として、スピリチュアリティの聖地のアトス訪問の前後の二作『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』と『ねじまき鳥クロニクル』を取り上げ、記憶・歴史の描き方への考察を通して、村上作品における深層意識の捉え方の特徴を解明した。

第5章では、〈世界の終り〉という異世界は「影」が切り離された紛争・憎しみのない完全なユートピアという表と、意識における無定型かつ強力な権力(「壁」)に縛ら

れるディストピアという裏の二重構造を持つことを分析した上で、同じモチーフでありながら失敗作とされた「街と、その不確かな壁」との比較を通して、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』から記憶のテーマを抽出した。心の暗い面としての影の上に、記憶というモチーフが加えられ、物語構造が大きく変化しただけではなく、記憶総体を固定的な蓄積と見なす「組織」と〈世界の終り〉のシステムに抗して、ベルクソンの記憶論に通じる記憶総体と現在とが連動する能動的なメカニズムを提示したことを解明した。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』は深層意識の要素を利用して、ディストピアからの脱出を描く最初の作品だと位置づけたのである。

第6章では、『ねじまき鳥クロニクル』に描かれる記憶・歴史の呪いという、記憶と歴史のネガティブな面の意味を論じた。90年代の「歴史修正主義」をめぐる歴史論争を導入し、「歴史修正主義」に対する反論が歴史における「真実」と「事実」の問題を解決できていない状況を整理した上で、村上の『ねじまき鳥クロニクル』を「歴史修正主義」に対抗する物語として位置づけた。本作品は、〈事実〉の揺らぎを暴き、歴史修正主義者が掲げる「事実」の实在への批判になると同時に、〈真実〉の实在が登場人物の物語を通して検証され、「物語論」における「真実」の欠落を埋めていると指摘した。歴史が心の動きと結ばれることによって、今・この生に密接する歴史の〈真実〉、实在性が描かれることを評価したのである。

第5章と第6章で論じた記憶・歴史の实在性、自律性は、ポストモダンの状況における記憶の断片性、構築性に対する一種のアンチテーゼであるに留まらず、今・この代替不可能性の主張でもあり、「別なもの、別な私」、「オルタナティブ」な生を求める80年代の宗教性の問題に対しても一種のアンチテーゼとなると指摘した。オウム真理教事件の後、村上文学では影・記憶が信仰と絡められて深められていく。第三部では、その信仰というテーマに焦点を当て、深層心理学や宗教心理学を取り入れつつ、オウム真理教事件の後の作品に描かれる深層意識のあり方、深層意識の変容を検討した。

第7章では、オウム真理教事件の後の村上春樹とユング派分析家である河合隼雄との対談を手掛かりにして、悪(影)の必要性、悪(影)との付き合い方の問題に対する村上の問題意識を掘り出し、村上によって宗教の問題が心理学的に捉えられていることを解明した。また宗教をテーマにする最初の小説「神の子どもたちはみな踊る」を取り上げ、新新宗教とは異なる神のあり方、つまり、悪(影)の抱擁による内発的な〈神〉のあり様が描き出されていることを分析した。そして、ジェームス・ヒルマン、河合隼雄によるユング批判を導入し、深層意識の捉え方についての村上とユングの相違点、及びヒルマンや河合隼雄との類似点を解明し、統合を拒否する点で、村上文学に描かれる深層意識の変容が新新宗教や新霊性運動が求める深層意識の変容のあり方とは異なることを示した。

第8章では、『IQ84』に描かれる神の問題を検討した。『羊をめぐる冒険』における「羊」と『IQ84』における「リトル・ピープル」を比較し、「羊」が無限の絶対者であるのに対して、「リトル・ピープル」は有限な神であることを検証した。神の有限性は、神の間の制約／善と悪の「均衡」の維持という「IQ84」世界のルールと結びつけられ、その仕組みは、パラレル・ワールドではなく、ウィリアム・ジェイムズの多宇宙的宇宙の思想に当てはまることを解明した。また、天吾と青豆の愛という信仰とジェイムズの主張する宗教的体験との差異を抽出し、多神論的な状況のもとに、ジェイムズの思想を源にする宗教性を超える信仰のあり方を『IQ84』から掘り出した。

第9章では、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の分析によって、「リトル・ピープル」によるディストピアの物語パターンの形成を検証した。まず、本作品に描かれるユートピア共同体に着眼し、共同体のユートピア性から出発してユートピアの中にあるディストピア性を露呈させてから、また新たなユートピア性に戻る、という循環的な物語構造を解明した。また、ディストピアは、「ビッグブラザー」による確固とした支配システムではなく、「リトル・ピープル」による個人の内面と連動して生まれる閉鎖的な思想回路として描かれ、被害性・加害性両面を持つディストピア人間(多崎、シロ)が造形されていることを論じた。それゆえに、ディストピアに直面する際にはただ受動的に操られるのではなく、記憶・内面の変容によってディストピアから脱出できる可能性があることが、この作品によって提示されていることを論じた。オウム真理教事件の後の村上文学に描かれる「孤絶」の境地と、深層意識の変容によってその中から脱出するという物語は、「リトル・ピープル」によるディストピア物語の反復であると指摘し、そのようなディストピアの物語は、宗教と宗教、宗教と非宗教の間の境界線を越え、普遍的な機能を持つと評価した。

第一部から第三部までの議論を踏まえ、結びでは、意識上の権威的な理想主義、意識上のポストモダン的な理想主義、意識下のポストモダン的な理想主義という20世紀後半の理想主義の三つの層を抽出し、理想主義との関わりから村上文学が「デタッチメント」から「コミットコメント」へ転向する意味を再解釈した。「デタッチメント」は、意識上の権威的な理想主義と意識上のポストモダン的な理想主義を相対化し批判する姿勢を貫き、それらに対して距離を置く姿勢である。一方、オウム真理教事件の後の「コミットコメント」は、意識下のポストモダン的な理想主義の暴走についての責任意識、反省意識によるものであると同時に、宗教性の追究とは異なる彼の文学のオリジナリティを主張する姿勢によるものである。「コミットコメント」が、主体の深層意識の変容に重きを置いているのは、スピリチュアリティの興隆現象に見られる安易な深層意識の扱い方に対抗する意味を持つと論じたのである。最後に、現代宗教をめぐる研究動向の中に村上文学を位置付け、村上が目指す「コミットメント」は、共存関係・連帯関係を模索する方法の一つとして他者の異質性を前提にする宗教との共

存論とは異なり、異質性よりも、意識の深層の次元における自己と他者の共通性を訴える特徴を持つと指摘した。オウム真理教事件以降、深層意識の描写によって自己の中の他者性、自己と他者との共通性を広げる作業を村上は繰り返していると言える。そのような作業は、ヒルマンによる反原理主義の心理学的なアプローチに近く、外部世界の次元で議論すべき宗教の問題を後景化する一面があるものの、寛容・共存・連帯の困難を強く意識した上での選択として、宗教の個人化に対応し、意識下の寛容・共存・連帯に新たな地平を開く意義があるものである。